

## 児童期・青年期における生徒指導の展望

### — その意義と集団理解の視点から —

高澤 健司<sup>(1)</sup>

学校活動における生徒指導あるいは生活指導の意義やその役割について概観し、指導についての考え方について述べ、子どもたちの集団理解の考え方について発達の視点と社会的な視点からそれぞれの視点からの考え方、その理解の方法について心理学的的方法論から検討し、また、集団と個の成長についての研究動向について学童保育と授業実践の研究を例としてとりあげて、集団と個の成長についての研究動向について論考した。その結果、集団理解のいずれの視点においても個の成長や支援が含まれており、子ども一人ひとりの成長を育む活動という理念に基づいた生徒指導・生活指導が必要であることが示された。そのためには理解の方法においても集団と個人相互のダイナミクスをとらえる方法の検討が求められることが示唆された。

キーワード：生徒指導，生活指導，集団理解

#### はじめに

子どもをとりまく環境とともに、子どもたちの対人環境も変化したといわれ、子どもをとりまく問題も変化しているといわれる。そのような中で、学校における生徒指導のあり方も問われている。高澤（2016）では、児童期・青年期にある子どもたちをとりまく環境と問題行動の変遷をとらえ、現代における生徒指導上の課題について情報環境，友人関係，異性関係の視点から論じ，ソーシャルネットワークサービス（SNS）や性に関する意識の変化を踏まえた生徒指導の必要性について述べた。そして，これからの生徒指導の方向づけについて，疎外をできる限り生み出さないようにするためには寛容の醸成が重要であり，その寛容に基づく信頼関係を形成する手段としてピアカウンセリングをあげてその可能性について検討した。また，児童生徒が仲間同士で認めあい，信頼関係を形成することの重要性を述べた。そこで，その前提となる児童生徒の集団がもつ役割を検討することが必要であり，その集団理解が生徒指導にどう位置づくのか改め

て検討する必要がある。

以上を踏まえて，本論文では学校活動における生徒指導あるいは生活指導の意義やその役割について概観し，そこで述べられている児童生徒の集団理解の意味，そして集団理解からみた生徒指導の今後のあり方についての展望を検討することを目的とする。

#### 生徒指導・生活指導の意義

文部科学省（2010）によると，「生徒指導とは，一人一人の児童生徒の人格を尊重し，個性の伸長を図りながら，社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」とされ，「すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよい発達を目指すとともに，学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く，充実したものを目指す」と示されている。基本的には学校内における指導が中心となるが，その範囲は学校内だけにとどまらず，いじめや非行，不登校といった学校外にも及ぶものとなっており，子どもたちの生活全体から生徒指導を考えることが求められている（高

<sup>(1)</sup>福山市立大学教育学部児童教育学科 e-mail: k-takasawa@fcu.ac.jp

澤, 2016)。そこで, 生徒指導の意味や意義がどのような文脈でとらえられてきたかについて検討する。

生徒指導に類する言葉として生活指導がある。文部科学省(2010)の生徒指導提要では、『生活指導』は多義的に使われていることや, 小学校段階から高等学校段階までの体系的な指導の観点, 用語を統一した方がわかりやすいという観点から, 本書では『生徒指導』としている」とされており, 文科省関連の資料では生徒指導で統一されている。しかし, 高澤(2016)で生徒指導の場合は学校内にとどまらない範囲と示され, 白井(1999)においても「生活指導と生徒指導をとくに区別していません」とされている例もあることから, 本論文では文科省関連の文脈では生徒指導とし, それ以外の文脈では生活指導と記す。

山本(2014)によると, 生活指導は大正期の民主主義を求める社会運動を背景に, 反管理主義的教育実践として生まれたとされる。その生活指導には2つの系譜があるとされ, ひとつは生活綴方教育を源流として, 現実に対する子どものありのままの意識や感情, 態度そのものを指導対象とし, ものの見方, 考え方, 感じ方を育てる指導としての生活指導であり, この系譜は教科・教科外の両方の領域にわたる思想, 態度, 価値観などの生き方にかかわる教育として発展する。もうひとつは, 生活訓練の中で用いられた生活指導で, 生活の中での行為・行動を指導の対象として, 目的に従って自主的に行動をコントロールできるように教育するというものあり, 主に自由主義的な私立学校運動の中で行われていた。

戦後になると, 戦後新教育と呼ばれる経験主義・児童中心主義教育が行われ, 生活指導分野でもアメリカのガイダンス理論が導入された。藤井(2014)によると, ガイダンスとは, 子どもたちが自らの問題を解決するよう自己決定・自己選択できるように援助するという意味で, その受容の背景には道徳教育のあり方が模索されていたことと, 戦後の中等教育においてホームルームの時間が新設され, そこで行われるものとしてガイダンスがあったとしている。このガイダンス理論は戦後の日本にほぼそのまま移入され, 文部省初等中等教育局(1950)の『中学校・高等学校の生徒指導』においても紙幅の多くがこのガイダンスに割かれている。その一方で, 戦前の生活指導の伝統を受け継いだ教師たちは生活綴方教育を復興し, 生活現実に

即した生活指導を目指したとされる。

このような系譜の中で今日の生活指導・生徒指導が行われているが, その意義はどう示されているのだろうか。折出(2014)は「生活指導とは, 他者とのつながり・出会い直しを通して, 他者との関係と自己の自立の意味を学ぶのを援助し導く実践である」と述べている。ここでは関係性が重要な視点としてあげられ, 関係性とは, かかわりをもつ個々人の意味や感情の相互作用を動的にとらえ, その変化・成長していく姿において子どもたちを理解する概念と定義づけられ, 集団のダイナミクスや発達の視点が重要であることが示されている。また, この定義には他者との関係とともに自立があげられていることも重要である。この自立の視点は児童期から青年期にかけての発達において重要な概念である。この自立については身辺自立や職業的自立, 経済的自立, 社会的自立など(慎, 2008)さまざまに定義されるが, 折出(2007)は人間らしく生きる権利として自立が必要であるとして人間的自立を述べている。これは「さまざまな人との人格的な関係を媒介にして, 他に従属しない自分の生き方を形成すること」とされ, 支えあいながら個を確立していくことの重要性を説いたものである。この人間的自立を踏まえると, 自立は個人のみで成し遂げるものではなく, 他者や集団との関わりの中で培われていくことがわかる。その醸成を促していくことが生活指導であり, その実践のためには集団の中で生活する子どもたちをとらえ, 集団づくりを行っていくことが必要であることが示されたといえる。

ここまで生活指導における集団理解の重要性を述べたが, もうひとつ重要な視点が指導とは何かについてである。学校教育における指導は生活指導・生徒指導だけで述べられることはなく, 教科指導などでも行われる。ここでは生活指導における指導とはどのようなものなのか整理する。折出(2014)は指導には2つのタイプがあるとし, ひとつは, 指導者は集団に対する正しい指針をもっており, 子ども集団を自分の指導のもとに従わせ, その指導・被指導関係を確立することが教育であるという生活指導観であり, もうひとつは, 活動の主体性の方向づけという視点に立ち, 子ども集団の対話・討論・討議を保障し, 一人ひとりの主体的な現実の把握を大事にし, 子どもたちなりの力で選び取り, 共同で決めていくことを重視する指導観である。

前者は統制主義になって従順な態度を示す子どもたちになっていくものを目指すものであり、後者は市民社会に開かれた民主主義的なものを目指すものとされる。人間的自立の考えに立つのであれば、後者の考え方が望ましく、また自分であるべき行動を考える力が培われるものと考えられる。

### 子どもたちの集団理解の考え方

生活指導の理念や意義において重視されることが、集団における子どもというとらえ方であり、その集団をどう形成するのか、そしてそれをどう理解するのか重要であることが示された。しかし、子どもたちの集団は他者からの働きかけで形成されるものだけでなく、自発的に創りだされる集団でもある。こうした子どもたちの集団に対する理解の考え方について検討する。

白井（1999）によると、私たちには集団に所属しようという性質があるとし、その集団の魅力として以下の3点をあげている。第1に、安定した人間関係や心理的安定が得られること。第2に、目標を実現したり、情報を得たり、自分を高めたりできること。第3に、周囲から高く評価されている集団に入ること、自分が外部から高く評価されて満足感が得られるというものである。また、魅力が高い集団は、集団の成員を結びつけ、集団としての働きを強める作用である凝集性を高めるとしており、教師は集団の凝集性を高める作用とそれを壊す作用のそれぞれを考えながら、子どもが主人公となる集団をつくる必要があると述べている。また、教育目標の達成のために編成される小集団をフォーマル・グループ、友人関係といった子どもたちが自発的につくる集団をインフォーマル・グループと呼び、学級集団はこれら教師が設定するフォーマル・グループと子どもたちがつくるインフォーマル・グループの二重構造をもっており、特に後者は集団の発展は一直線にされるのではなく、サブグループの発生と消滅といったジグザグなもので、集団づくりと集団こわしが交互に行われるものと考えられる。このように、学級内に限らず子どもたちがつくる集団は動的なものであり、常にその時点における現状と集団づくりの過程をとらえることが重要となってくる。

発達の視点から子どもたちの集団づくりをとらえると、小学校低学年では、学校内においては教室で席が隣である、学校外においては近所同士といった外的

な要因によって友人関係がつくられ、この時期において教師は学級のなかで何をしたいのか、何をしたいいけないのかというルールづくりをし、学級集団における規範を子どもに身につけさせることが求められる一方で、集団ならではの楽しさを子どもが感じられるように指導することが求められる（大久保，2009）。児童期後半である小学校後半になると、自立のための仲間関係として徒党を組むようになり、ギャング・グループと呼ばれる集団が形成され、この時期はギャングエイジと呼ばれる。この集団では特に同一行動による一体感が重んじられ、同じ遊びをいっしょにするものが仲間であると考えられる。思春期前半の中学生によく見られるのがチャム・グループであり、同じ興味・関心やクラブ活動などを通じてその関係が結ばれ、ギャング・グループの特徴が同一行動にあるならば、チャム・グループの特徴は同一言語にあるとされる（保坂，1998）。また、この時期は同調圧力も高まる時期であり、同調行動の実験において他者との同調が高まるのもこの時期であるとされる（白井，1999）。そして高校生になると、ギャング・グループやチャム・グループに加えて、互いの価値観や理想・将来の生き方などを語り合う関係であるピア・グループという関係が生じてくる（保坂，1998）。こうした発達の視点を組み込んで集団を理解することが重要である。

一方、根本（1991）は学級集団をとらえる社会心理学的概念枠として、学級内相互作用、学級集団規範、学級集団構造、学級集団の社会的風土から検討している。学級内相互作用では、小集団内の行動は対人行動と個人的行動とに分けられ、後者に個人内行動と個人的遂行とが含まれる。個人内行動とは個人の意識から発する行動であり、個人的遂行とは課題の遂行が含まれる。学級集団内の行動は対人行動が大部分であり、集団内の複雑な力の布置を背景として表出され、公的要請の力と仲間集団の力の場の中で自らの欲求を調整しつつ行動しているとされる。学級集団規範は、対人相互作用の中で次第に葛藤を調整する集団的ルールが確立されたもので、学級集団の成員に共有されている認知、態度、行動に関する多かれ少なかれ持続する準拠枠であるとされている。きまりや規則は多くの成員の準拠枠となっはじめて規範になる。そうした中で、地位や位置にふさわしい行動についての成員の認知である役割期待がつくられ、公的あるいは私的な役割期

待に基づいて成員は行動する。また、学級集団の構造では、白井（1999）はフォーマル・グループとされた公的構造と、インフォーマル・グループとされた非公的構造があり、それぞれは相互規定的関係にあるとしている。相互規定的であるゆえに、公的関係と非公的関係と形式的に分けるのではなく、両者の混交として構造次元をとらえることが、学級集団のダイナミクスにより合致しその理解に有効であると述べている。最後の学級集団の社会的風土では、学級集団規範が子どもたちの認知や態度、行動に与える斉一性をとらえ、学級集団成員の学級におけるある程度持続的な感情、態度ないし行動の学級全体としての傾向を学級集団の社会的風土と定義し、学級集団志気と学級集団凝集性の2次元でとらえられるとしている。

このように学級集団のとらえ方について発達の視点からと社会的視点からとらえてきたが、いずれの視点においても重要な点としてあげられていたのが、集団がもつダイナミクスをいかにとらえるかということである。発達の視点においては年齢や学年に応じて集団が持つ意味や役割が変化し、社会的視点では個人と集団との関係が常に動いていることを念頭に置いて集団をみることがあげられており、個と同様に集団についても常に観察し、理解することが重要であるといえる。

集団を含めた児童生徒理解の方法について、鈴木（2011）は心理学研究法の立場から述べている。まず観察法では自然的観察法と参加観察法があるとし、自然的観察法は児童生徒がどのように行動を始め、行動をしているのかということ、教師が介入したり指示をしたりしないで、ありのままに観察するもので、参加観察法は同じ人が集団を外から眺めている観察者としての役割と、集団の中で関わっている参加者としての役割を同時に果たすものであり、教師は観察者と参加者という2つの視点をあわせ持った第3の視点を有効に働かせることが重要とされる。この参加観察法では児童生徒だけでなく、教師自身も自分の動きを把握しておくことが求められる。次にあげられるのが面接法である。面接法は主に言葉を使って個人間のコミュニケーションを図ることから、傾聴が重視される。その傾聴の中で児童生徒が発した言葉の背景の理解が重要である。次に質問紙法があり、個人や集団の考え方や意識の大まかな特徴を把握する上では有効な手段である。また日記や作文、詩、絵画といった創作物を

もちいる方法もあり、こちらは文章や絵という距離を置いた表現手段を用いることで、児童生徒が自分の思いを比較的容易に伝えることができるものの、解釈が難しい点も特徴としてあげられる。最後にあげられるのが心理検査法である。心理検査には質問紙法の人格検査や投影法の人格検査があげられるが、いずれも実施や解釈には熟練が必要とされるものであるが、学級満足度や学校生活意欲、ソーシャルスキルを測定するQ-Uといった検査を用いることで児童生徒の状況を客観的な測度をもとに知ることができるものもある。このようにさまざまな方法を用いて児童生徒の理解を試みることができるが、プライバシーといった倫理的な配慮が求められるものであり、集団のダイナミクスをどうとらえるかという点に課題があると考えられる。

### 集団と個の成長

ここ数年の集団理解研究において、集団を通じた個の成長についての研究がよくみられる。古屋（2013）は学童保育における集団に焦点をあて、現代の子どもたちが集団の場で状況や、それを支援・指導する大人たちが直面している課題とその課題に対する取り組みについて検討している。まず生起している問題として、学童保育が学校と習い事のすきまのつなぎの場にしかならない現状から、生活の場としての学童保育の意味がなくなっていることをあげ、集団生活の場の意味がうまく伝わらず子ども集団が成立しない、そして、子どもたちに安心感がもたらされず、子どもが主体的に遊びに没頭して主体的に行動を起こすことが困難になりつつあることをあげている。こうした課題に対して、集団と個の成長の視点から支援のあり方として、まず学童保育が安全と安心を保障する場になるよう子ども同士、子どもと大人の間の信頼関係をつくることがあげられている。その実現には、互いの共通目標のもとでの交流の時間を保障するために大人が肯定的子ども観に立つことが重要であり、遊びがもたらす機能として主体性と社会性を育てるという視点でもって子どもたちの集団をとらえることの大切さがあげられている。さらに、集団のなかで生じるトラブルを子どもたち自身で解決に導くことで自治的な力の育成につながるとしている。以上のことから、学校場面に限らず生活する子どもたちの視点で子どもたちの集団をとらえることが重要であり、それぞれの集団が子

どもたちにもたらす意味を考えること, さらに子ども集団と大人との関係についての研究が今後の課題になりうる事が示唆されたといえる。

鈴木(2017)は, 個が育つ集団をつくるための予防的・開発的な生徒指導について, 授業づくりの視点から検討している。授業実践では小学5年生を対象に構成的グループエンカウンターをとり入れた道徳の授業をとりあげており, 生徒指導の機能として3機能を授業の視点に位置づけている。その3機能とは教師の役割として, 自己選択・自己決定の場を提供する, 共感的な人間関係を育成する場を設定する, 学びを価値づけて自己存在感を味わわせるというものである。それに対しての子どもの姿として, 学習課題に対する自分の考えを持つ, 他者と関わりながら話し合いやグループ等での活動に取り組む, 振り返りを通して個の学びの高まりを実感するといった点をあげ, これらを生徒指導に活かすためには, 教師が個々の子どもの学びを尊重する意識をより強く持ち, より多くの教師が生徒指導の視点を加えた授業に取り組むことが必要と述べている。また, 生徒指導の3機能のさらなる実践として, 小学3年生に対して構成的エンカウンターを採り入れて子どもたちがお互いを知るという学級活動を行っている。この結果では, 子どもたちがコミュニケーションを図り他者と協力しあうことが確認され, 特に個の実態や集団の成熟度を把握した上で, 個々のプラス面だけでなくマイナス面にまで目を向けさせて自己開示を行うことはより深い他者理解につながり, 児童が互いに個性を尊重しあう素地となる事が示されている。こうした実践は, 特別に新しいことを行うということではなく, 普段の学校内における活動に子どもたちの自己理解や他者理解の観点を組み込むことで子どもたち相互の信頼を育む取り組みである。その一方で, こうした取り組みを不得意とする子どもに対してどのようなフォローを行っていくかについても考慮する必要があり, 実践的な課題といえよう。

## 今後に向けて

ここまで主に学校でなされる生徒指導・生活指導について, その経緯と意義について概観し, 指導についての考え方について述べた。つづいて, 子どもたちの集団理解の考え方について, 発達的な視点と社会的な視点からそれぞれの視点からの考え方, そしてその理

解の方法について心理学的な方法論から検討し, 最後に集団と個の成長についての研究動向について学童保育と授業実践の例からとりあげた。これらの知見をもとに, 集団理解から見た生徒指導・生活指導のあり方について検討する。

生徒指導・生活指導における集団理解で重視される視点として, いずれの視点においても個の成長や支援が含まれていることである。集団に視点を集中させてしまうと, 個を見る視点を失いがちであるが, 生徒指導・生活指導のそもそもの目的は子どもたち一人ひとりの成長や発達を育む活動である。生徒指導・生活指導における集団という, 集団における秩序の維持が目的ととらえられかねないおそれがあるが, そこには一人ひとりの子どもがいるということを忘れてはならない。したがって, 理解の方法においても集団と個人相互のダイナミクスをとらえる方法を今後検討する必要があるだろう。

次に重要な視点は, 一人ひとりの子どもたちの主体性を育む活動であるということである。折出(2014)で指摘されたように, 指導には指導・被指導関係を確立する生活指導観もあるが, 子ども集団の対話を保障する指導によって子どもたちの主体性が育まれ, 子どもの自立にもつながっていく。対話をうながす手法としては鈴木(2017)で用いられている構成的エンカウンターグループや, 高澤(2016)で述べたピアカウンセリングが有効と考えられる。

今後も子ども一人ひとりの生活世界を理解し, それに根ざした生徒指導・生活指導が必要である。そして教師は集団における個の発達を踏まえるとともに, 子ども主体性や対話を育む生徒指導・生活指導が求められるといえよう。

## 引用文献

- 藤井啓之(2014)生活指導の展開 山本敏郎・藤井啓之・高橋英児・福田淳志(著)新しい時代の生活指導 有斐閣, pp. 47-68
- 古屋喜美代(2013)児童・生徒指導—集団と個の成長 神奈川大学心理・教育研究論集, 34, pp. 43-52
- 保坂亨(1998)児童期・思春期の発達 下山晴彦(編)教育心理学II 東京大学出版会, pp. 103-123
- 文部科学省(2010)生徒指導提要 教育図書
- 文部省初等中等教育局(1950)中学校・高等学校の生徒指導

日本教育振興会

- 根本橋夫 (1991) 学級集団の規範, 発達過程および機能 稲越孝雄・岩垣攝・根本橋夫 (編) 学級集団の理論と実践 福村出版, pp. 46-67
- 大久保智生 (2009) 学級集団づくり 心理科学研究会 (編) 小学生の生活とこころの発達 福村出版, pp. 60-71
- 折出健二 (2007) 人間的自立の教育実践学 創風社
- 折出健二 (2014) 現代の生活指導と子ども観 折出健二 (編) 生活指導改訂版 学文社, pp. 14-24
- 慎英弘 (2008) 自立の概念と構造 四天王寺大学紀要, 46, pp. 85-107
- 白井利明 (1999) 生活指導の心理学 勁草書房
- 鈴木健一 (2011) 生徒指導の方法 宮下一博・河野荘子 (編) 改訂版生きる力を育む生徒指導 北樹出版, pp. 22-31
- 鈴木有人 (2017) 個が育つ集団をつくる予防的・開発的な生徒指導—組織で取り組む認め合い, 高め合う授業づくり— 山形大学大学院教育実践研究科年報, 8, pp. 174-181
- 高澤健司 (2016) 児童期・青年期におけるこれからの生徒指導の検討 —信頼関係から寛容と主体性を育む生徒指導— 福山市立大学教育学部研究紀要, 4, pp. 63-68
- 山本敏郎 (2014) 生活指導の源流 山本敏郎・藤井啓之・高橋英児・福田淳志 (著) 新しい時代の生活指導 有斐閣, pp. 27-46

(2017年10月23日受稿, 2017年11月24日受理)

## Review on Meaning of Student Guidance on Childhood and Adolescence: The Meaning and Understanding Students Group

TAKASAWA Kenji <sup>(1)</sup>

This paper reviews meaning of student guidance in Japan and suggests ways of understanding student groups in Japanese school and community. The student guidance in Japan is aimed to develop students' identity and promote their growth of independence. In student guidance, it is important to understand youth as a group and introduce both developmental and social perspectives to achieve that purpose. We are expected to consider both group and individual at school guidance. We should try to understand their dynamics and it is necessary to develop group consciousness through promoting conversation and discussion between students.

Keywords : student guidance, students group, group dynamics

---

<sup>(1)</sup>Department of Childhood Education, Faculty of Education, Fukuyama City University